事業完了報告書

調査研究期間等

調査研究期間	令和４年６月１０日　～　令和５年３月１５日
調査研究事項	≪委託研究：夜間中学における教育活動充実に係る調査研究≫ Ⅰ　教育課程に関すること ・母語を日本語としない生徒への日本語指導を踏まえた教科指導法と授業の展開方法全般について Ⅳ　教職員の配置・研修に関すること ・日本語指導（教科指導含む）の方法と工夫 ・夜間学級専門スタッフによる生徒の実態に合う教育活動と支援 ・養護教諭と保健室の効果的活用について
調査研究のねらい	多国籍の生徒が在籍し、日本語の習熟度や現地校での既習状況が異なる中での教科指導の在り方は、依然として大きな課題である。夜間学級の教育活動をさらに充実させ、多様な生徒の受け入れの拡大が図れるように生徒個々に応じた効果的な指導方法の調査研究をねらいとする。 また、教師の日本語指導についての指導力向上、安全安心に学校生活が過ごせるように生徒の実態に合わせてサポートする夜間学級専門スタッフ（主に通訳等）による教育活動、養護教諭と保健室の効果的活用についても研修し検証する。
調査研究の成果	Ⅰ　教育課程に関することについて 〇母語を日本語としない生徒への日本語指導を踏まえた教科指導法と授業の展開方法全般について（生徒個々に応じた効果的な指導方法や教材づくり） ※　生徒たちに「確かな学力」を身に付けさせるためには、生徒一人一人の実態に応じた課題の選定や教材準備、指導方法の開発が必要である。外国籍の生徒が多く在籍する市川市立大洲中学校夜間学級（以下「本学級」とする）の現状においては、生徒個々の既習内容や学習特性を把握した上で、生徒たちの主体的・協働的な学びを具現化することが重要である。そこで、特に次の２点について調査研究を行った。 ①一人一人の生徒たちの能力（日本語習得の段階等）や特性に応じた「個別学習」の充実 ②多国籍の生徒たちが、自分の考えや思いを伝え合い、

	学び合う力を高められる「協働学習」の充実 ①　「個別学習」の充実を図るための取組 　生徒の能力や特性に応じると共に、主体的に学ぶことのできる教材の発掘に取り組んだり指導方法を模索したりした。 ・習熟度別グループ編成 　日本語指導を含む国語に限らず、数学や英語等についても、必要に応じて年度内中に変更することを前提に、生徒の習熟度を確認しながら教科毎に幾つかのグループに分け、担当職員を決めて授業を展開した。 ・漢字のルビ振りと重要事項に対する多言語表記 　特に各教科における重要事項及び重要語句は、やさしい日本語を選択したり漢字にルビを振ったりするとともに、生徒の比較的理解しやすい言語（英語・中国語・ペルシャ語等）に訳したものを掲載して日本語理解・学習内容理解の一助とした。 ・言語情報の精選とＩＣＴ機器による視覚的効果の活用 　学習・思考の手順や様々な情報等を提示する際、可能な限りやさしい日本語を選択するとともに言語情報を極力少なくし、図や画像・動画等の視覚的情報に置き換えて、パワーポイントのアニメーション機能を活用する等して生徒の理解を促した。 ・ゲーム的要素のある学習 　英語の単語学習でビンゴを使うことをはじめ、英会話の学習に双六を使い、英語学習に楽しみながら取り組める方法に関する情報を集めて授業づくりをした。 　社会科における地図記号の学習では、カルタ（「すたぺんドリル」より）を用意して競わせながら覚えさせたり、都道府県名の学習で「社会科ソング」（「しちだ教育研究所」より）やカルタ（「ちびむすドリル」より）を用意して楽しみながら覚えさせたりした。「NHK for school」（えいごビート「出身国当てゲーム」）を視聴して、時差の解き方の一つを知る学習も有効であった。 　また、教科学習だけでなく、日々の学級活動の中で、様々な知識・言葉等を学習・伝達する際、画像や動画を使用した三択

	クイズを作成し、適宜、協働して答えさせた。三択クイズは、三つの中に正解が必ずあり、正確の確率もある程度確保されているため、選択する根拠を確認するよう促すことで、生徒は諦めず思考することができた。 授業実践１　理科「身近な生物の観察」（４月）＜参考＞ 理科の学習が知的好奇心や探究心をもって自然に親しむことであることを理解できるよう「身近な生物の観察」を導入に行った。ワークシートは、生徒一人一人がそれぞれ見通しをもって学習が進められるよう作成し、重要事項は絵や画像でも可能な限り示し、説明等は英語と中国語の表記でも掲載することで、学習内容・日本語理解の一助にした。 授業実践２　社会科「時差について」（１月） 生徒の生活や既習内容と学習課題の接点等を見出し、先に触れたように三択クイズを作成して、学ぶ意義を感得させたり学習内容を把握させたりした。また、言語的情報を可能な限り精査して少なくし、視覚的情報を織り交ぜながら生徒の理解を補助し、適宜漢字にルビを振ったり、多言語による表記を掲載した資料やスライドを作成したりして、学習内容・日本語理解の一助とした。 ②「協働学習」の充実を図るための取組 生徒が多国籍であることから、次の３つの視点をもって学習指導を試みた。 ・思考を深めるための交流活動 （母国語を同じくする小グループ交流活動） ・思考を広げるための交流活動 （母国語を異にする小グループ交流活動） ・思考・情報を共有する発表やプレゼン等の交流活動 （日本語を共通語とする多言語における大グループ交流活動：ＩＣＴ機器・タブレット・大型提示装置の翻訳機能やオクリンク等を活用） 授業実践３　道徳「夢の地図を描こう」（１０月） 生徒一人一人がそれぞれに学ぶ意義をもって入学している

	ことに着目し、個々に夢を叶えるための「夢の地図」（目標達成シート）を作成させることにした。具体的には、まず母国語を同じくする生徒でグループをつくり「外国の人と友達になるにはどうすればよいか」を深く考えさせた。次に、外国の人同士のグループをつくり、同じ国の人と深めた考えについて、日本語を共通語にして伝え合わせ、その思考を広げさせた。こうして「夢の地図」を作成する思考活動・学習モデルに体験的に触れさせた後、個々に「夢の地図」を描き、日本語で発表した。なお、一人で行き詰った時は、他者に相談しても良いこととした。生徒一人一人、自分の夢とそれを叶えるための学びに関わるため、自分と真摯に向き合って自己を表現する言葉を探す姿が見られ、日本語理解の一助ともなった。 授業実践４　特別活動「夜間学級と昼間学級との交流」（１１月） 夜間学級と昼間学級との交流を試みた。具体的には、合唱祭という学校行事を活用して、夜間学級の合唱（ビデオ参加）を視聴した昼間部生徒の感想を読み、それに対する感想や昼間部生徒の合唱を視聴した感想を昼間部生徒に伝える学習に取り組んだ。その際、昼間部生徒の感想文とともに、その生徒の文章の主述や表現を教師が整えて英語、中国語、ネパール語、ペルシャ語に翻訳して一緒に提示し、日本語理解の一助とした。そして、母国語を同じくする生徒のグループをつくり、昼間部生徒の感想に対する感想を話し合わせたり、昼間部生徒の合唱を視聴した感想を話し合わせたりして思考を深めさせ、その感想を日本語にして昼間部生徒に伝えた。昼間部生徒の感想文が学習モデルとなり、自己（グループ）の思いや考えを日本語で表現する学習に臨むことができた。 Ⅳ　教職員の配置・研修に関することについて ○日本語指導について 本学級では、日本語学級は設置していない。日本語を覚えるまでは、始業前の学習相談の時間と国語の時間が日本語学習の時間になる。なお、１学期間は、生徒の実態に応じて社会科や理科の時間に日本語指導の時間を設けている。そして、２学期からは各教科指導の中で教科の特色を生かした日本語指導にもなるよう授業づくりをしている。なお、日本語学習の時間と

	なる国語は、習熟度別グループ編成をして、担当職員を決めて授業づくりをしており、必要に応じてグループ編成や担当職員を変更した。 　日本語指導をはじめとして、教育活動全般に関する教職員の研修について、以下のように取り組んだ。 ・日本語指導の研修会 　生徒の学習状況がある程度把握できた７月に、日本語教師の資格を持つ運営協力者を講師として迎え、日本語学習の進め方について研修会を行った。学級の実態として問題を感じる「母語による日本語習得の速さの違いや指導上の配慮事項」等、事前に質問事項を提示しておくことで、具体的な事例を通して生徒理解を深めることができた。 ・教科指導の中での日本語指導の在り方 　夜間学級専門スタッフからの情報提供（教材や指導方法）について、毎週火曜日に行う夜間学級職員打合せ（職員会議の研修的機能）を活用して管理職から教職員に適宜周知したり、教職員相互に情報提供を行ったりした。また、実際の授業づくりの段階において、必要に応じて管理職がＭＴの指導・助言を個別に行い、職員打ち合わせ時にＳＴの配置や役割等について確認を行った。 　※ＭＴメインティーチャー　ＳＴサブティーチャー ・卒業後の進路追跡調査に関する研修 　７月に「卒業後の進路追跡調査に関する研修」としての位置付けをもたせて、卒業生を迎えて、在校生に向けた高校生活の紹介や中学校生活を振り返り助言をもらう「卒業生の話を聞く会」を実施した。教員も在校生も、外国籍生徒の中学卒業後の高校生活の様子を知るとともに、特に中学校段階でどのような指導・学びが大切かを考える機会となった。卒業生の言葉から、生徒一人一人がもつ学ぶ目的・動機はもちろん大切であるが、学習場面に限らず、日本語で話す・日本語を使う機会を増やすことが重要であると感じた。 　１２月には、千葉県立佐倉南高等学校（定時制）の視察を受けることで、本学級概要説明（課題提示を含む）と授業参観を実施して本学級の取組を知ってもらうとともに、卒業生の様子

	を担当学年職員から直接聞くことができ、「卒業後の進路追跡調査に関する研修」に位置付くものともなった。中学校段階での生徒と教員の個別対応が、高校生活における教員をはじめとする他者との関わり方につながっているという言葉があった。 ・来日する外国籍の生徒の現状についての研修 　本学級にアフガニスタン出身の生徒の在籍が多いことから、１０月に「四街道国際交流会」の会長であり「多文化フリースクールちば」の代表でもある方を講師に迎え、異文化理解をテーマに研修会を行った。特に、アフガニスタン人のコミュニティーの現状や現地の教育事情について講演をしていただき、日本の中学校での適切な学習指導や生活指導について考える契機を得ることができた。 　１１月には、行政書士の方を講師に迎え、全国、県、市川市の状況を踏まえながら、現在の外国人の在留状況・在留管理制度・在留資格の基礎事項、在留外国人の義務等について理解を深めることができた。また、在留外国人が直面する課題や学習・生活指導、生徒に関する在留管理制度における注意点等についても理解を深めることができた。さらに、福祉的な行政サービスや発達課題への対応等についても、法制度的な視点で学ぶことができた。進路指導において、長期的展望に立ち道筋を立てること、考えさせることの必要性を確認できたことが大変有意義であった。 ・他市、他県等の夜間中学の状況に関する研修 　１０月に、松戸市立第一中学校みらい分校（県内二番目の夜間中学）を視察訪問し、概要説明を受けたり授業参観をしたりした。教育活動について共通点と相違点のあることがわかり、今後情報交換をすることの有用性を確認することができた。そして、１月に松戸市立第一中学校みらい分校からの学校訪問を受けることで、相互の学校・生徒の実態等について情報交換をすることができ、両校を比較することで、それぞれの学校の課題や取組について考える契機となった。他市、他県等の夜間中学との情報交換によって「不登校経験者は、その年齢により課題が異なる」ことに気付けたことは大きな収穫であった。 ・研究授業（理科）

	日本語の習得状況に応じた学習と教材づくりをテーマに、４月に実施した「身近な生物の観察（タンポポ）」と同様の「生物」を対象にした学習の研究授業を行った。学習を始めて約１０か月が経ち、日本語の習得状況も向上したことを踏まえ、内容は中学２、３年生段階の「セキツイ動物の進化・分類」とした。そのため、言語情報は確実に増えている。そこで、内容理解の一助として画像を多く用いるとともに、言語情報の色分けをすることで、支援に厚みをもたせた。 ・課題検討会議（現状及び課題の把握） 週に一度行う夜間学級職員打合せ（職員会議の研修的機能）を活用し、夜間学級の設置意義をはじめ、不登校経験者の心理や発達課題に関する知識等について、生徒の実態・状況を踏まえながら情報提供や対処方法等、管理職による助言・指導を適宜行った。また、教職員相互に情報提供も行い、生徒及び教育活動について現状と課題を把握し、その改善に向けて検討・協議を重ねた。今年度、保護者同席の個別面談を経て、１６歳と１８歳の２名の生徒が療育手帳を取得し、来年度特別支援学校高等部へ進学することは特筆すべき点であった。 〇夜間学級専門スタッフを活用した教育活動の在り方について 先に触れたように、夜間学級専門スタッフが７月に実施した教職員の「日本語指導の研修会」の講師を担った。事前に学級の実態として問題を感じる点を伝えて、その点について助言・指導を依頼したことにより、学級の実態把握とその指導という観点において、９月以降の勤務を円滑に行うことができた。なお、前年度末に行われた新入生・編入生受け入れ体験授業への協力も当該スタッフに要請していたため、それも今年度の教育活動の準備の一助になった。これらを踏まえ、専門性を活かして生徒の実態に応じた教育活動を行うことはもちろん、教職員に対する支援・助言も適宜行われた。一方、生徒たちから夜間学級専門スタッフに支援を求める姿も数多くみられた。それは、学習面に限らず、生活面の相談等にも及ぶものであった。 教育課程の工夫推進にあたっては、先に触れた「個別学習」の充実を図るべく主体的に学ぶことのできる教材や指導方法に関する教員への提示・助言が行われた。 また、日本語習得レベルに応じた学習支援を進められるよう

	に、通訳を中心にサポートが実施された。特に、日本語の読み書きが苦手な生徒や発達課題を有する生徒に対して専門性（日本語指導や英語）を生かした支援や個に寄り添った支援を行った。「協働学習」の充実に関しては、生徒間の交流を促したり、話し合いの進行をしたり、その活性化に専門性が活かされた。 〇養護教諭配置による役割及び保健室設置による活用方法 ・今年度、夜間学級に養護教諭が配置され３年目となった。保健指導、健康診断（歯科検診内科検診）など、専門的立場から指導や実施をした。令和３年２月に設置された保健室は、保健指導・健康指導などを受けたことのない外国籍の生徒への個別指導・個別相談の場所としても大いに活用された。 ・未だ収束しないコロナ禍において、検温、健康観察、手洗い、マスク着用、消毒などコロナ対策を中心に職務に当たった。ＩＣＴ機器を使い保健指導も時節に応じて行った。不登校経験者や異文化故の疑問や悩みを抱える生徒などによる養護教諭への相談などで保健室利用が増えた。時に、生徒の家族の健康に関する相談も受けた。 〈 成果と課題 〉 （１）成果 　アンケート調査から、生徒は授業や学校生活に対しておおよそ満足している様子が読み取れた。個に応じた指導・個別最適な学びを目指し、ＩＣＴ機器を活用した授業づくりの取組がその結果につながってきたと思われる。 　外国籍の生徒が多い本学級では、次の点でタブレット等のＩＣＴ機器の活用はとても効果的であった。 ①ウェブ上の翻訳ツールの活用 ・日本語の意味を調べて学習内容を把握したり理解したりする。 ・日本語の意味を調べて自分の意見をまとめたり発表したりする。 ・日本語を共通語に他国の人とコミュニケーションをとったり学び合ったりする。 ②パワーポイントのプレゼン・アニメーション機能の活用 ・視覚的情報として画像や動画により学習内容等の理解を補充する。

	・学習の手順や留意事項の理解を補充する。 ③オクリンクの活用 ・他者と意見や情報を共有できる。 ④ポケトークの活用 ・特に日本語学習初期段階の生徒の面談や日常会話など、一対一対応におけるコミュニケーションをスムーズにする。 本務教員６名、講師５名（夜間学級専門スタッフ含む）、養護教諭１名で、ティームティーチング体制を組み、習熟度に応じたグループ編成の授業を行い、生徒の実態に合った特別の教育課程を実施してきた。日本に来て間もない生徒が多いことから日本語の指導が基礎となるので、よりきめ細やかな支援ができる夜間学級専門スタッフの配置は効果的であった。 養護教諭の配置や保健室が設置されたことにより、生徒の心身の健康を細やかにとらえた適切な助言・指導が可能となり、生徒は安心して学校生活を送ることができている。具体的には、健康診断の意義の説明から始まり、時節に応じて健康教育・保健指導を実施することにより、生徒自身はもちろん、その家族の健康の保持増進を考え始めて相談する姿も見られ、その意識は高まっている。また、不登校経験者の心理や異文化故の悩みにも寄り添い、生徒たちを陰ながら支える存在となっている。 （２）課題 ・外国籍の生徒が多く、母国での教育環境や教育内容によって学力差があり、日本語の習得状況にも差が生じてくる。そのような中で教科学習も行っていくため、さらなる学力差を生み出すことがある。一方、日本の中学を卒業した学び直しの生徒も在籍しており、どのような授業づくりをするかが課題となっている。また、不登校経験者や仕事をしながら遠方より通学する生徒も多いことから欠席も少なくなく、継続した学習が成立しづらい状況に応えることも課題となっている。なお、こうした課題に応えるには、ＩＣＴ機器の効果的活用・視覚教材の活用や開発が重要になるであろう。 ・養護教諭が配置され、保健指導・健康教育の充実を図っていくとともに、文化や生活習慣の違いによる心理的な課題などにも寄り添い支援していくことが必要となる。 ・外国籍の生徒の言語的な課題だけでなく、発達課題のある生徒や不登校経験者など、多様な生徒が増えており、そのニー

	ズに合わせた夜間学級職員の指導力、支援力、専門性を向上させることが課題である。 ・上記のような外国籍の生徒の増加に伴い、生徒の本学級卒業後の高校生活や高校卒業後の就労、その先にある在留資格変更、日本定住など、法制度等を念頭に生徒の人生を可能な限り展望して指導・支援することが望ましいであろう。進路指導においては、生徒・保護者と共に卒業後の道筋を描き、必要に応じて関係機関につなぐことも新たな課題になるであろう。